心の理論インタビューの検討

青年期後期から成人期の日本人女性への応用

辻 弘美

(大阪樟蔭女子大学心理学科)

キーワード：心的状態語、心の理論、養育的感受性

Adaptation of ToM interview for Japanese women

Hiromi TSUJI

(Osaka Shoin Women's University)

Key Words: mental states language, theory of mind, maternal sensitivity

目 的

成人の心の理論の検討について実験的検討はされている一方、日常社会で一般的にどこまで心の理論の枠組みを適用しているかを測定する方法についての検討は少ない。本研究は、Bosacki (2000) による心の理論インタビューの日本語話者への適応可能性について検討する。

方 法

研究対象者 乳幼児期の子どもをもつ母親 34 名 (年齢 $M = 35.5$ 歳, $SD = 5.3$) および女子大学生 47 名 (年齢 $M = 20.0$ 歳, $SD = 1.2$) を対象とし、以下のプロトコルでインタビューを実施した。インタビューは、表情認知実験、質問紙への回答を含んだ一連の個別セッション (約 60 分) の中で実施した。

ToM インタビュー課題

曖昧な場面における登場人物の内的状態について、自己の解釈を求め、その回答内容を評価するための課題として考案された (Bosacki, 2000) 課題を用いた。オリジナルのストーリー課題を日本語話者向けに一部改変し、インタビュー・プロトコルは原著に沿って実施した。課題は、2 つの独立したテーマ (課題①女の子とブランコ/課題②校外学習) からなる。

ナンシーとメアリーは運動場で遊んでいる子たちをみています。ナンシーは、黙ってメアリーにそっと触れると、ついさきほどやって来てブランコで遊んでいる女の子に目をやりました。ナンシーは、メアリーの方を見てにっこりとしています。メアリーが「うん」とうなずくと、2 人は女の子のいるブランコのところに行きました。

女の子は、見知らぬ 2 人が自分の方に歩いてくるのを見ています。その女の子は、この 2 人がさきから、お互いに近寄ってにこにこしている様子をみていました。女の子にとってこの 2 人は同じクラスですが、今まで話をしたことがありません。女の子は、2 人が何をしにこちらにくるのだろうと思っています。

Fig. 1 課題①女の子とブランコのテーマ

手続き 刺激ストーリーの提示はパソコンで文章とともに、女性によって読みあげられた録音音声で再生し行った。ストーリーをもとに自分なりにイメージを膨らませて回答してもらうよう指示した後、曖昧な場面内容の解釈について、次の視点から質問を行った。①視点取得：「なぜナンシーはメアリーににっこりしたのですか」、②共感的配慮：「なぜ、メアリーはうなずいたのですか」、③登場人物の性格の認識④異なる解釈可能性に関し質問した。テーマごとにインタビューを行い、「回答は全て録音した。所要時間は 15～25 分であった。

分析 回答内容がどの程度複雑な心的状態を含んでいるかによって点数を与えた。回答内容のコーディングは 2 名が独立に行った。コーダー間の一致度は 94% であった。不一致項目については議論の上、コーディング内容を決定した。

結 果

ToM インタビュー得点の内的整合性 (Cronbach's α

$= .72$) および分布の正規性は確認できた (Shapiro-Wilk $W = .98, p > .05$)。

Table 1. ToM インタビュー得点の記述統計

	M (SD)		Min-Max	
	Mothers	Students	Mothers	Students
視点取得合計得点	13.8	12.8	9.0	7.0
(0-18)	(2.4)	(2.8)	18.0	18.0
共感的配慮合計得点	6.5	6.3	3.0	2.0
点 (0-12)	(1.6)	(1.6)	10.0	10.0
登場人物の性格合	3.7	3.1	2.0	1.0
計得点 (0-6)	(1.1)	(1.0)	6.0	5.0
異なる解釈合計得点	2.9	1.3	0.0	0.0
点 (0-6)	(1.7)	(1.3)	6.0	4.0
課題①合計得点	13.6	12.0	9.0	6.0
(0-21)	(2.7)	(2.9)	21.0	18.0
課題②合計得点	13.4	11.5	6.0	7.0
(0-21)	(3.1)	(2.2)	20.0	18.0
総合計得点	26.9	23.5	16.0	15.0
(0-42)	(5.0)	(4.6)	37.0	34.0

女子大学生、母親を独立群とし、ToM インタビュー得点を比較したところ、どちらの課題においても、母親群が女子大学生群より有意に得点が高かった： $t_{課題①}(79) = 2.5, p < .05$, $t_{課題②}(79) = 3.2, p < .01$ 。①視点取得および②共感的配慮には有意差はなかったが③登場人物の性格の認識④異なる解釈可能性の項目点数にそれぞれ有意差が認められた。

考 察

本研究の結果より、女性の青年期後期から成人期において、他者の内面を意識した言語表現の発達の变化が認められることが示唆された。Bosacki (2000) の思春期青年を対象とした方法を、青年期以降の対象者に適応できる可能性が確認できたと考えられる。また、英語話者の青年女子のデータ ($M = 30.3$, $SD = 4.6$) と比較すると、日本語話者の女性の得点有意に低いと言えることから、ToM インタビューを成人に適用することにより天井効果が観測される可能性は低いといえる。一方、日本語話者のインタビュー得点が低い理由や、インタビュー方法の妥当性について今後の検討が求められる。

引用文献

Bosacki, S.D. (2000). Theory of Mind and self-concept in preadolescents: Links with gender and language. *Journal of Educational Psychology*, **92**, 709-717.